



エッセイ

北京、鄭州、ほくよう市、上海訪問

SCE・Net 谷本 慎生

E-06

発行日

2006.8.30

平成 7 年 3 月河南省壮行会主席顧志平氏の招待で中国を訪問してから 11 年が経過した。この度、当時顧さんの日本語通訳兼秘書役をしていた尚英照さんの奥さんである陳彩玲さんからの誘いと、2006 第 4 届中国河南省投資貿易治談会による商談会に招待したい旨の話があり、石炭のガス化でお世話になった宇部の末山哲英さんも興味を示されたので一緒に参加することになった。平成 18 年 4 月 10 日北京で飛行機を乗り継ぎ、鄭州市、ほくよう市、上海を訪れた。今回の旅行で感じた中国の現状をまとめてみた。

1. 北京空港での乗り継ぎ

初日：前日夜泊った Airport Garden Hotel から空港までのシャトルバスは一時間毎に運行されている。空港に着いた所で男 2 人が私のスーツケースとバッグを車から降ろす。てっきりバス関係の人かと思っていたら荷物をカートに載せてどんどん空港ビルの上へ移動するので私も後を付いて行く。エレベーターの中で男達と 3 人になり、ここで不注意だったかなと思い始めた途端に“チップ、チップ”と言って手を差し出してきた。エレベーターのドアが開いた途端に、“No”と言ってカートを取り戻した。丁度、昨日のインフォメーション窓口の若い男がニコニコと笑いかけてきた。笑みを返してエスカレーターで三階へ。エスカレーターを降りると鄭州行きのフライトにボーディングの手続きをしなければならぬ。どちらに行くべきかキョロキョロしていると一寸すれたような感じの制服のような服装をした女性二人が近づいてきてチケットを見せろという。空港勤務の女性かなと思ってチケットを渡したらそれをもってカウンターの方へどんどん歩き出した。どうも安心できないのでチケットを取り返す。周りには搭乗を待つ人達が沢山居り特別に危ない気配は無かったがやはり”チップ、チップ”“とわめいていた。荷物とかチケットなどは知らない人には絶対に渡してはいけないという鉄則を忘れかけていた様だ。北京の空港も日本語はともかくとして英語の出来るスタッフをオリンピックに向けてもっとと配備するべきである。やはり日本の空港、飛行機が一番良い。

2. 鄭州市も変わりました

前回北京から汽車で来たので飛行場は始めてだが随分大きな空港である。ホテルで陳さんの出迎えを受ける。末山さんは上海から既に到着しておられた。夕方 6 時ごろ商談会の開会式が開催されるとの事で金利平さん（陳さんの部下で日本語の通訳）の案内で近くの会場へ向かう。隣接するビルの三階までぶち抜きになったホールに 2,000 人が集まり大パーティーが開催された。開会式の挨拶など余り関係なさそう専ら赤ワインを飲み、久しぶりの中国料理をつまみながら末山さん、金さんと三人で三階のテラスから下を眺めていた。女性のショーあり、フ

ルートなどの楽器の演奏ありと楽しかった。金さんが下を見ながら”私の昔の上司が居る“と言って私を紹介してくれたのが河南省人民政府の副省長、史濟春氏である。彼が今回のフェアの実行責任者であるとのこと。夜は私の部屋に集まって今回準備した石炭ガス化他各種の項目、或いは案件につき皆さんに説明した。河南省台前県商務局局長庁張峰氏、河南省台前県前具人民政府副県長吉合現氏等関係者が参加した。遅くまでプロジェクトの議論が続いたが充実した一日であった。

鄭州市は河南省の州都であり人口数百万の大都会であるが日本には意外と知られていない。河南省は黄河の南に位置し東側の山東省に接する。人口は約一億人で中国に 20-30 州ある中では平野の多い豊かな州である。古くは殷、夏、周などの古代国家発祥の地であり、洛陽、開封といった歴史的に有名な都市が近くにある。この中原の地には古代に栄えた 13 王朝のうち 10 近くが存在した。ここを中心に北京は北の都であり東に行けば青島、連雲港と交通の要所がある。現在、北京、上海、天津などの三つの特別市に加えて四番目の特別市として申請中とのこと。学生数 44,000 人の鄭州大学見学の後、イグジビションホールに向かう。最近完成したこのホールはとにかく大きく、5 階には河南省の産品を展示説明するブースが数百のオーダーで並んでいた。尚さんが県長をしている台前県のブースではゴムタイヤ輸出の話をしたかったが実際に生産しているのは農業用機械のチューブしか作っていなかった。他の会社は日本の化学会社から供与された技術でアクリルアミドを製造販売していた。なつめを売っている店では美女が 10 人余りセールスのプロモーションをしていて、一緒に写真を撮ってもらったらなつめの詰め合わせ一箱をお土産に貰った。後ほど顧志平さんから聞いたが、このホールは学生時代の同級生で建築専攻の黒川記章氏の設計によるものであると聞いて驚いた。ホールの最上階は広大な床面積を数本の柱から垂らした太いワイヤーによって支え、そのため 5 階のフロアーには柱がひとつも無い。このユニークな手法には予め着目してフランスかどこかのデザインであろうと話合っていた矢先のことであり、黒川氏に敬意を評すると共に感心した次第である。

3 日目：午前中、ぼくよう市の状況に関する説明会に出席した。ぼくよう市の下に県が 5 つありそのうちのひとつが尚英照さんが県長である台前県である。ぼくよう市(PUYANG)は面積 188km²、経済成長率は前年比 14.5-19.5%の伸びと極めて高い。ぼくよう市の歴史は古く、6400 年前には中国で最初に貝を散りばめて龍の形を表した遺跡が発掘されている。本遺跡の真ん中には人骨があり反対側には同じように白い貝を並べて虎の形をしたものが作られている。一年 365 日としたのもこの地で始まり、漢字をスタートした。天文学も既に知られていた。石油化学の原料である天然ガスは 1.6MMm³、石炭は地下で 14 Billion tonが発見されており、紙、小麦、食用油、家畜を産する。環境は良くないので改良を要する。午後は時間が空いたので鄭州市にある河南博物館を見学した。夏、殷、周時代の旧石器時代、石器、青銅器、鉄器、陶器のほか生活様式など様々な歴史的背景を示す展示と解説が行われたが目を見張るものばかりであった。漢の時代など余り

にも近くに中国の歴史の深さを感じた。建物はこの地で発達した天文台を真似て作られ、入り口の大広間には人が竜とライオンを両手に従えている大型の模型がある。夕食会は河南省招待所にて顧さんの招待で開催された。顧さんの部下である河南省外省投資管理局副局長、宋国卿氏と末山、谷本、陳、金さんの6人が参加し、顧さんの音頭で老酒で乾杯、最初の3度は随意は認められず乾杯から始まった。今日は河南省で一番美味しい中国料理を準備したと再会を喜んで下さった。中国のエネルギー、環境問題は益々重要になってくるし、私が指摘した一人っ子政策についても他国に迷惑をかけないためにも必要であるが一人っ子をいかに根性を持った人間に育て上げるかが今後の大きな課題であると力説していた。

3. 一度は行ってみたいぼくよう市

4日目：牡丹園に案内してもらう予定であったが急遽ぼくよう市へメタノールプラントを見学に行くこととなった。鄭州市からぼくよう市迄は190キロで4レーンの高速道路で2・3時間のドライブである。道路の周囲は一面の平野で広い農地が広がる。ハイウェイから10メートルは植林をすることが義務付けられておりポプラの木が延々と植えてある。そのむこうに紫の花が点在するのは桐、白は梨で一面が小麦畑である。雪柳の白い花、黄色いレンギョウも見える。若い運転手がスピードを上げ140キロで飛ばすので何度か速度を落とすように声をかける。140キロは時速85マイルであり長く持続させる速度ではない。大きい黄河を渡りぼくよう市に到着。市は河南省でも最も住みやすい都市とされており、漢字の発祥の地であり、歴史、文化、環境、旅行など多くの魅力的なファクターが人を惹きつけるとのことである。

河南省中原加工有限公司のビー殿峰総経理、王宋立副総経理、ぼくよう対外連絡局の胡化波局長などの案内でメタノール工場を視察。次いで河南省中原升茂緑色農業発展有限公司に移動し、王喜生総経理からコンポストプラントの計画について説明を受けた。工場の技術的な水準は未だに高くないが将来に対する抱負と計画は注目に値する。夕食はぼくようホテルにて中共ぼくよう市委員会の書記、呉多臣氏主催で開催された。呉さんは顧志平さんの後任の方であり高官である。ぼくよう市人民政府市長助理の路留瑞氏が同席する。ソフトタッチで感じの良い方であり、料理は立派で老酒が美味しかった。ぼくよう市は日本の岡山県と三重県と友好都市である。

5日目：ぼくよう市最後の日でホテルをチェックアウトの後一路鄭州飛行場へ向かう。途中車の中で日中友好問題につき話が弾んだ。陳さんは日本がアメリカのいうなりでもっと主張がないとずるいという。金さんは小泉総理大臣の靖国参拝は良くないと。お2人の意見は概して中国の新聞記事から外れていないと思わせるのは考える暇がないぐらい働くのに忙しい為であろうか。私は次の3点を挙げて私なりの意見を述べた。

- 1) 戦争は終わり 60年間日本は平和国家としてどの国にも経済援助を行い平和と経済発展のために貢献してきた。
- 2) 靖国問題は内政干渉である。国には夫々独自の尊重されるべき文化がある。

中国はもっと大国であって欲しい。日本は台湾問題で中国に賛同しているなど中国の意向には配慮している。小異を捨てて大同団結が必要である。

- 3) 責められるべきはイギリスであろう。1840年清朝末期のアヘン戦争で中国はどれだけ被害を受け欧米列強の餌食にされたか。クウェートの独立も英国の差し金で1962年と比較的最近のことあり石油資源確保以外に正当な理由はない。アラブ国家の国境の線引きも然り。日本ばかり責める理由が判らない。やはり広い国土に分散する民衆対策かと思われても仕方がない。

4. 上海での楽しい一時

予定より早く上海（虹橋）空港に到着後、上海逸和龍柏飯店（旧日航ホテル）へ。夕食は県泰豊で久しぶりに台湾ベースの美味しい中華料理を頂いた。

6日目：10時に出迎えの車で延安西路を経て市街の中心へ向かう。高層の住宅用アパートとユニークなデザインの大型ビルが立ち並び11年前に訪れた時に比べると町の活気はまさに雲泥の差を感じさせる。ニューヨークよりもビルは新しく間隔が広いしデザインが斬新でありむしろヒューストンを思わせる感じだ。最初に訪れたのが豫園（古城公園）。400年前に或るお金持ちが親のために建立したとのことである。何頭かの龍が庭園のセクションを分ける塀の上に横たわっている。建物の屋根は中国調で品良くカーブしているし池、植木、庭などの配列も見事である。テレビ塔の近くの川岸にある楓雅でのランチはビールと久しぶりに日本食の握りずしをとる。目の前の黄浦江を大型小型のタンカーや貨物船がひっきりなしに通り過ぎていく。右手へ少し行くとすぐ揚子江と合流する。次いで中国共産党第一回会議室記念館、道ひとつ隔てて近代的な町並みから古い上海の町並みに入る。これが従来、我々が認識していた町だと思われ、洗濯物が干してある、曲がりくねった狭い路地の間を暫く歩く。最後に近代的な若者の町に行くがヨーロッパ風の土産屋や建物が並んでいる。夕食は吉祥日本料理店に出かけた。この料理屋は日本大使館の裏手にあり、昨年暴徒に襲われた建物の被害など未だ修復されていない窓などが散見されて複雑な思いであった。

7日目：朝早くホテルの庭をひとりで散歩しながらパンダのいる上海動物園に行くことを思いつき片道20分位歩いて動物園に着く。かなり大きな動物園でパンダが有名とのことである。入場料30元は70歳以上20元に割引があった。入口には芝生の広場があり大人が風揚げに夢中。公園の中は綺麗に着飾らせた一人っ子を母親、或いは祖母が手を引いて楽しんでいる姿は微笑ましい。園内を回るトレインがあったので10元払って乗る事にした。パンダ館の前で降りたがガラス張りの建物の中に一頭いるだけ、しかも手入れが良くないのか体の毛の色の元来白い部分が薄汚れていて可愛さが減殺された格好である。トレインはどのルートで走るのか判らないし人に聞くことも出来ずここから歩いてライオン、豹、トラ、キリン、犀、シマウマなどを見て歩く。空港までの距離は60キロ以上あるが4車線の高速道路なのでタクシーに乗り一時間余りで到着。浦東国際空港は斬新なデザインで驚かされた。建物の外側は垂直ではなく外側に傾斜していて両側を数百本のロープで支え、各々の懸垂状のロープから垂直な柱がビルのドーム上

の屋根を支えている。誰が設計したのか恐らくフランス人ではなかろうかなどと想像しながらレストランで中華そばとビールを一本で腹ごしらえをする。48 元払ったがうまくない。斜めになった建物の間は芝生、花壇の間に植木がアレンジされていてスペース的にも効率が良い。中国近代化の活力を至る所で感じる。こんな国に未だ日本は ODA を出さなければならないのかと不思議だ。今回の中国訪問に関する率直な感想は車の多さと年率 10%で発展する中国国民のバイタリティーであろう。最先端技術よりもむしろ重厚長大産業時代の日本の技術がさしあたってこの国にとって重要であろうと感じ、エネルギー、環境汚染防止関連で今後とも協力を考えたい。

谷本 禎生記